

2013年(平成25年)6月5日 水曜日 (10)

コエボシクラゲ

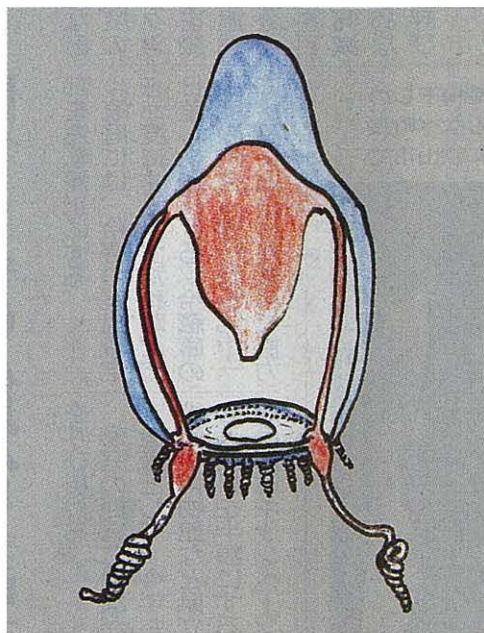
久保田 信

98



コエボシクラゲは、田辺湾では捕獲されにくい珍しいクラゲだ。

傘頂にゼラチン質の突起が



外形が烏帽子のようなコエボシクラゲ (山田1983改写)

あって外形が烏帽子状になっているので、この和名が付けられた。「コ」が冠せられているのは、傘高が2・2ミ以下で、同じような外見をしたエボシクラゲより小さいためである。

体を十字状に走る消化循環系である放射管は、他のさまざまなクラゲと同様に4本である。それらが傘縁と接する所に、よく発達した傘縁触手が1本ずつ、計4本伸長している。触手はこれ以外に、傘

縁に全体に割合規則正しく配列されている。それらはいずれも短く、正軸の4本よりも小さな触手である。この小触手は最多で28本あり、その根元の膨らみである触手瘤(りゅう)には、眼点は見られない。エボシクラゲが眼点を持っているのと対照的である。傘の中央に垂れ下がるのが中が胃袋になっている口柄(こうへい)で、形は倒立フラスコ状である。4カ所で胃袋の外側に生殖巣が形成される。口柄の先端には複雑な唇は一切つづられておらず、口唇は単純で丸い。

本種は本州中部から南西諸島まで分布する。田辺湾でも1950年代の晩夏にまれに採取されていたが、その後は少数しか発見されていない。世界ではインド洋、太平洋、大西洋、地中海にと広く分布する。

ポリプは不明。外国産の近縁種は群体性のポリプだが、クラゲ芽の形成方法は不明なままである。

(京都大学准教授)